

論	文
---	---

魂の外から内へ，そして外へ

—— トマス・アキナスにおける魂の受動としての愛 ——

松 村 良 祐

1. 序論：魂の被る受動・情念としての愛

トマスは『神学大全』第1-2部の冒頭において「魂の諸々の情念と呼ばれる，人間とその他の動物に共通である働き (actus)」と述べ，人間と動物に共通のものとしての「情念論 (1-2, qq.22-48)」の位置付けを明らかにした上で¹，愛という情念の考察をその冒頭に配している。本稿では，こうした情念論において展開される「魂の被る受動・情念としての愛」の記述をもとに人間の持つ愛の在り方について見てみたい。もっとも，人間とは単なる動物ではなく理性的な動物であるから，人間にはこの情念としての愛以外にも，それを超えた上位の愛の形，つまり知性的ないし理性的な愛が存在している。それゆえ，人間の持つ愛の在り方を明らかにするためには，そうした上位の愛について考察する必要があるし，この情念としての愛自体もそうした知性や理性といった能力のもとで考える必要が出てくるのかもしれない。しかし，我々はまず人間とその他の動物に共通のものとして語られる情念としての愛の記述をもとにトマスにおいて愛がどのように考えられているのかを見てみたい。

ところで，情念と訳されるラテン語の *passio* は「働きを受け取ること」のみならず，「働きを受け取ることによって生じた変化の状態」をも意味し，特にそれが魂について言われるとき，単なる物体の被る「受動」から区別され，「情念」「感情」と訳される。そして，こうした魂の受動という事

¹ S.T.1-2, q.6, intro.: de actibus qui sunt homini aliisque animalibus communes, qui dicuntur animae passionēs.

態が何らかの働きを被ることで成立するということからすれば、そこにはその働きかけを行う作用者とそれを受け取る受動者の二つが存在するということになる。つまり、魂の内に愛が受動という仕方で生じるという場合、欲求対象が作用者であるのに対し、感覚的な欲求が受動者であって、そうした欲求対象が欲求に働きかけることで欲求の内に生じた変化の状態が愛であるということになる²。そこで、本稿では、魂の受動として語られる愛の内実を捉えるに当たって、こうした作用者と受動者の関係に焦点を定めた上で、トマスがそこで受動者である感覚的欲求の内に

² トマスの情念理解の特徴の一つは情念が働き (actus) と捉えられていることである。つまり、情念と訳されるラテン語の *passio* は本来「働きを受け取ること」つまり、アリストテレス的な意味での第8の範疇に当たる「受動」を意味する。それゆえ、受動という意味を持つ *passio* が働き (actus) と捉えられていることには何らかの矛盾があるようにも思われる。しかし、受動が働きであると言われていることは、受動が第9の範疇、つまり能動 (actio) にも属しているというような意味ではない。むしろ、受動が働きであるということは、受動という範疇にある限りでの働きを持つという意味である。つまり、トマスにおいて *passio* とは単に対象の働きを受け取るだけでなく、受け取ることによって受動者の内に生じた変化や反応、働きをも含意する語なのである。

こうした *passio* という語を近代語においてどのように訳出するかということは、『神学大全』の近代語訳者の間でも度々問題となってきた。彼らが問題としたことは、(1) 上述したような *passio* という語の持つ意味の広さと共に、(2) ラテン語の *passio* に連なる近代語の *passion* がスコラ的な用法からは全く縁遠いものになってしまったことが挙げられる。実際、*passion* が現代において「情熱」「熱狂」「恋情」を基本的な意味として持ち、理性によって規整されていない状態を表すのに対し、トマスはアリストテレスと共に「理性によって節度付けられた情念」の存在を認めているからである。Cf. *S.T.1-2*, q.24, aa.1-2.

このことに関して、仏語版訳者である Corvez は、“Nous traduisons *passio* par *passion*, faute d'un mot meilleur, et malgré l'équivoque. La *passion* des modernes est en effet toute autre que celle des scolastiques. Les mots: *affection*, *émotion*, *sentiment* ne conviendraient pas mieux, et encore moins: *inclination*, *penchant*, *instinct*, etc.” と述べている (Corvez, *Appendice 1*, p.179)。上記に見られる「他によい語がないために」や「曖昧さにもかかわらず」といった言葉は、トマスの用いる *passio* の意味がフランス語の *passion* と大きく異なるものであることを示唆している。

生じた愛を表す上で用いる「用語」に注目してみたい。

しかしながら、こうした用語に対する分析はトマスの愛を巡る近年の諸研究においても一部遠ざけられる傾向にある。実際、トマスがこの情念論において愛の内実を表す上で用いる用語は、トマスの愛に関心を寄せる研究者らからもときに「奇妙な揺らぎ」と評されるように³、*coaptatio* や *inclinatio*, *complacentia*, *connaturalitas*, *consonantia*, *convenientia*, *proportio*, *aptitudo* など実に多岐に亘り、それは必ずしも一定のものではないからである。それゆえ、上述の諸研究はトマスが愛を語るに当たって用いる運動の始点から運動それ自体、静止へと至る自然学的な運動のモデルに目を向け、欲望や喜びといった他の情念との比較を通して愛の内実を探ろうとする⁴。周知のように、こうした自然学的なモデルを援用しての愛の位置付け、更には諸情念の整理は、それまでの思想家には見られないトマスのオリジナルであり⁵、他の

また、独語版訳者はこの語の訳語を巡って一貫して *Leidenschaft* を採用しているように思われる。この語の本来的な意味 (*leiden*, *erleiden*) を重視してのことであろう。しかし、この訳語に関する事情はフランス語の場合と似ており、17世紀以降において「熱情」というような現代的な意味へと変わっていったと述べている。(Kommentar, S.474)。次いで、英語版訳者である D'Arcy は、主に *emotion* と訳しているが、アリストテレス的な文脈の中で語られる際には *passion* と訳し分けている (Introduction, p.23)。例えば、S.T.1-2, q.26, a.2 や 1-2, q.23, a.2, c. といった箇所の訳を参照。更に、邦語版訳者である森氏は、*passio* を文脈に応じて「情念」「受動」と訳し分けているが、邦訳を出版した翌年に書かれた論考の中で、情念という語の「念」には心にかかる、思いや声を出して唱えるといった意味があり、認識の働きにも及びそうであるから、むしろ平凡に「感情」と訳した方が勝っていたかもしれないと述べている (森, 21 頁)。

³ この言葉は Wohlmann, 1981, p.210 による。

⁴ Drost, pp.47-58; Lombardo, pp.57-62 はこうした方向に舵を切る二編である。

⁵ トマスの情念論は西洋思想史上において現れた情念に対する初めての体系的な考察として高く評価されることが多い。Pinckaers, p.379 は「私の知る限り、教父にも中世にも長さや質の点でそれに匹敵する人間の感情についての研究は存在しなかった」と述べている。また、Gondreau, p.106 も歴史的な先例としてネメシウスとダマスケヌスを挙げた上で、彼らの試みを「小さいもの」と呼び、トマスの情念論を評価する。

情念との比較を通じて愛の内実を探ろうとする上記の諸研究のアプローチは、そうしたトマスの独創性を浮かび上がらせるものであるのかもしれない（こうした自然学的なモデルについては《引用1》を通じて第2節でも概括的に見ていく）。しかしながら、トマスの用いる上記の用語は、まさに愛という情念の内実を焦点とするものであり、それらの語は一見無造作に用いられているように見えながらも、文脈に応じて実に厳密な仕方で使い分けられ、愛という情念の持つ多様な表情がそれらの用語と共に映し出されている。それゆえ、トマスの語る愛の内実を浮かび上がらせるに当たっては、そうした個々の用語をその文脈と共に分析していくことが有効であるように思われるのである。

2. 魂の外から内へ：魂の受動としての愛に関する基本的理解

トマスの用いる用語に目を移す前に、まず作用者、つまり欲求対象からの働きかけとそれを被る受動者である感覚的欲求の関係をもとに、魂の受動として語られる愛に関するトマスの基本的な理解を確認しておこう。トマスは、『神学大全』第1-2部第26問題第2項に見られる問い「愛は受動であるか」において、愛を作用者の働きかけによって受動者の内に生じた受動として説明している。

《引用1》受動とは作用者によって受動者の内に生じた結果である。ところで、自然的作用者は受動者の内に二つの結果を導入するのであるが、一つには形相を、いま一つには形相に伴う運動を与える。例えば、物体を生むものは物体に重さと、重さに伴う運動を与える。そして、この重さ自体は、その重さのゆえに自身の本性に適った場所へと向かう運動の根源なのであるから、或る意味において (*quodammodo*) 自然本性的な愛とすることができる。これと同様に、欲求対象自体が欲求に自らに対する何らかの適合性 (*coaptatio*) — それは欲求対象への好感 (*complacentia*) である — をまず与え、そして、ここから欲求対象に対する運動が続く。実際、『魂について』第3巻にあるように、欲求的な運動は円環状に行われるからである。つまり、欲求対象が欲求の志向の内に自らを何らかの仕方で植えつけることで、欲求を

揺り動かす。すると、欲求は実際に獲得しようと欲求対象へと向かうのであって、こうして運動の始まりであったところがその終極となる。それゆえ、欲求対象によって欲求が受ける最初の変化が愛——それは欲求対象への好感に他ならない——と呼ばれる。そして、この好感から欲求対象に対する運動が生じるのであるが、これが欲望である。そして、最後にこの運動が静止に至るならば、それが喜びである。このように、愛は欲求対象によって起こる欲求の何らかの変化の内に成立するのであるから、愛が受動であることは明らかである⁶。

トマスは《引用1》の冒頭で「受動とは作用者によって受動者の内に生じた結果である」と述べた上で、受動を作用者の働きかけによって生じた形相をもとに受動者が動かされることと理解しているが、こうした形相とそれに伴う運動という点をもとに魂の被る受動という事態を描き出そうとする《引用1》は、トマスの師であったアルベルトゥスの『善について』における理解とは若干異なっている。いまアルベルトゥスとの相違をもとに魂の受動としての愛についてのトマスの理解の特徴を確認しておこう。『善について』の中で、アルベルトゥスは、受動が能動に

⁶ S.T.1-2, q.26, a.2, c.: *passio est effectus agentis in patiente. Agens autem naturale duplicem effectum inducit in patientem, nam primo quidem dat formam, secundo autem dat motum consequentem formam; sicut generans dat corpori gravitatem, et motum consequentem ipsam. Et ipsa gravitas, quae est principium motus ad locum connaturalem propter gravitatem, potest quodammodo dici amor naturalis. Sic etiam ipsum appetibile dat appetitui, primo quidem, quandam coaptationem ad ipsum, quae est complacentia appetibilis; ex qua sequitur motus ad appetibile. Nam appetitivus motus circulo agitur, ut dicitur in *III de anima*, appetibile enim movet appetitum, faciens se quodammodo in eius intentione; et appetitus tendit in appetibile realiter consequendum, ut sit ibi finis motus, ubi fuit principium. Prima ergo immutatio appetitus ab appetibili vocatur amor, qui nihil est aliud quam complacentia appetibilis; et ex hac complacentia sequitur motus in appetibile, qui est desiderium; et ultimo quies, quae est gaudium. Sic ergo, cum amor consistat in quadam immutatione appetitus ab appetibili, manifestum est quod amor et passio.*

対立する第 10 の範疇に当たるものと、性質の第 3 種に属するものという二つの仕方で理解されるとして受動の用法を整理した上で、魂の被る受動とは欲求対象からの働きかけを被ることで感覚的欲求の内に生じた「性質 (qualitas)」であると言う⁷。もっとも、こうした受動という語の持つ上記二つの用法は互いを排斥するようなものではない。魂の内に性質が生じるというとき、そのことは感覚的欲求が欲求対象の働きを被ること、つまり受動することを前提にしている。ここでアルベルトゥスが魂の受動を性質とすることに関しては、『善について』の中で徳・悪徳と情念の関係を問うに当たって、ときにそれらの基体 (materia) となることがある情念を魂の内に存在論的な仕方で位置付けようとする狙いがあるのかもしれない⁸。他方、この《引用 1》には、或いは、トマスが『神学大全』において展開する情念論には、こうした性質という視点からの受動に対する取り扱いは見られない。

確かに、中世におけるアリストテレスの『カテゴリー論』解釈の歴史

⁷ アルベルトゥスは、ダマスケヌスの『正統信仰論』とボワティエのギルベルトゥスの『六つの原理について』（現在では逸名著者の作品とされる）の受動に関する四つの定義を序論で取り上げた上で主文において次のように述べている。Albertus, *De bono*, tract.3, q.5, a.1, sol.: primae duae definitiones dantur tantum de passione, secundum quod est species qualitatis illata in sensibilem partem animae et non inferens. In parte enim sensibili animae tantum est motus alterationis, ut probavimus supra in *quaestionibus De anima*. Duae autem ultimae dantur de ipsa passione, secundum quod est genus generalissimum, sub quo est ordinatio praedicamentalium. Unde de illis nihil ad praesens, quia non sunt propria materia virtutum et vitiorum, de quibus hic intendimus; et ad 8. Jordan, pp.76-77, 84 によれば、『善について』はトマスがパリでアルベルトゥスに出会う前の 1243 年頃に著された著作であるが、『命題集注解』を中心として初期トマスに影響を与えたとされる。

⁸ アルベルトゥスにおいて情念は善悪いずれのものではない。むしろ、それが理性によって導かれれば徳の基体となり、理性の秩序付けから外れてしまえば悪徳の基体となる。Albertus, *De bono*, tract.3, q.5, a.1, prol.: Consequenter quaeritur de passionibus. Cum enim fortitudo tota consistat in passionibus illatis, temperantia autem cum suis partibus in passionibus innatis, videtur utile determinare de passionibus. et tract.1, q.6, a.1, sol.; Cunningham, p.202.

に目を向ける Knuutilla の研究が報告するように、本来移ろい易いものであるはずの受動を性質という恒常的なものとして理解してよいかということが中世において問題となったことは事実であり⁹、トマスの情念論に性質としての扱いが見られないことも、こうした受動そのものの位置付けにその理由があるのかもしれない。この問題は受動を性質の第3種に数えながらも、その後にそれが性質であることを否定しているようにも思われる『カテゴリー論』第8章の記述 (9b20-) に起源を持つものであるが、トマスも『真理論』の一節において当該箇所を念頭に置いた上で、「受動という仕方によって能力に付加される場合には、受容されるものは受容者に留まることはなく、そのものの性質となることもない。むしろ、それ（受容されるもの）は作用者から或る種の接触という仕方与えられた変化の状態であるため、容易に過ぎ去ってしまう」と述べている¹⁰。

しかしながら、その一方においてトマスはアリストテレスの『形而上学』第5巻の所謂「哲学用語辞典」に対する注解において、「受動とは性質の第3種である」と述べており¹¹、また、受動を性質と見なす記述がそ

⁹ アリストテレスは『カテゴリー論』第8章の冒頭で「受動的な性質」と「受動」の二つを性質の第3種に数えているが、それに続く箇所で、怒りっぽさのような受動的な性質が存在する一方で、怒りや悲しみといった一時的なものが存在するが、それらは受動と呼ばれるべきであって、性質ではないと述べている。Aristoteles, *Categoriae*, c.8, 9b20-. Knuutilla, 2002, pp.70-71, 2003, pp.261-264 によれば、こうした記述は、受動の位置付けを巡って後の注解者らにおける解釈上の争点となったが、アルベルトゥスはボエティウスに倣い、「厳密には性質とは言えない類の性質」として受動を理解する。

¹⁰ *Q. de veritate*, q.20, a.2, c.: Sciendum tamen est, quod illud quod additur potentiae, quandoque recipitur in ea per modum habitus, quandoque autem per modum passionis. Per modum passionis quando receptum non immanet recipienti, neque efficitur qualitas eius, sed quasi quodam contactu ab aliquo agente immutatur, et subito transit: sicut dicit philosophus in praedicamentis ruborem passionem, et non passibilem qualitatem, quando quis propter verecundiam in ruborem subito immutatur. ここで問題になっているのは身体的な受動であるが、アリストテレスによれば、このことは魂の受動においても同様であるとされる。Aristoteles, *Categoriae*, c.8, 9b32-.

の著作中に散見されることからすれば、トマスにおいても受動が一般的な意味において性質であることは確かであるように思われる。実際、上述の『真理論』に見出されるような理解は、アルベルトゥスの内にも見出される¹²。その意味で、《引用1》において、「愛は欲求対象によって起こる欲求の何らかの変化の内に成立する」と言われ、そこで欲求の内に「好感」や「適合性」といった変化の状態が生じているわけであるが、その種の状態はアルベルトゥスと同様に、欲求の内に生じた性質、或いは少なくとも性質に準じたものとして考えられるわけである。

さて、こうしたアルベルトゥスとの対比は、いま《引用1》において魂の受動という事態を捉える上でのトマスの関心がアルベルトゥスとは異なった方向に向けられていることを示している。実際、《引用1》において、トマスは受動という事態を受動者が作用者の働きかけによって生じた形相をもとに欲求対象へと動かされる「運動」という視点のもとで捉え、その上で、個々の情念をそこで欲求が展開する運動の個々のプロセスに位置付けようとする。その際、トマスの眼差しは、受動を受動者の内に生じた性質として捉えるアルベルトゥスのように作用者と受動者という二者間の関係にのみ注がれているわけではない。むしろ、その眼差しは、受動者とそれが向かうところの欲求対象をもその内に収めるより大きな広がりを持っているのである。それでは、こうしたトマスの受

¹¹ *In Metaph.*, lib.5, lect.20, n.1065: Ponit ergo primo, quatuor modos, quibus passio dicitur. Uno modo dicitur qualitas, secundum quam fit alteratio, sicut album et nigrum et huiusmodi. Et haec est tertia species qualitatis. 魂が受動を被るとき、そこに何らかの質的な変化が想定されていることはトマスにおいても同様である。実際、この受動という事態の内には、受用者の働きかけによってそのもの自身が元々持っていた状態が失われ、そこに新たな状態が生じることが含意されているが、このことは質的な変化に固有なことだからである。In 3 *Sent.*, d.15, q.2, a.1, qc.1, c.

¹² Albertus, *Liber de Praedicamentis*, tract.5, c.6: Quaecumque vero sunt de numero talium qualitatum, quae cito transeunt et cito et de facili solvuntur, dicitur passionibus. Non enim secundum has dicimur quales, sed potius aliquid passi. (….) Propter quod huiusmodi subitae immutationes dicuntur convenienter passionibus, non autem convenienter dicuntur qualitates, quia non simpliciter quales dicimur secundum eas; *Super Ethica*, lib.8, lect.5, sol.

動理解において、愛という情念がどのように位置付けられるものであるかを確認しておこう。

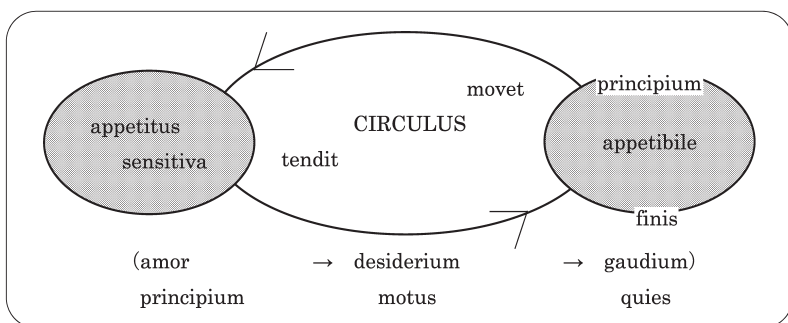
そこで、《引用1》の記述は、自然的な物体と感覚的欲求の二つに及ぶものであるが、まず自然的な物体は作用者から重さという形相を与えられ、それをもとに自身に適った場所、つまり大地の中心へと向かう場所的な運動を展開する。その際、物体に賦与された重さは中心へと向かう「運動の始点・根源」に当たるものであるが、そうした運動の始点・根源に当たるもの、つまり重さが自然本性的な愛と言われている。他方、感覚的欲求において、欲求は作用者からの働きかけをもとに欲求対象へと向かうという点で自然的な物体と同様の構造を採りつつも、そこでの運動は、欲求対象から欲求対象へと至る円環的な構造を伴って現れる¹³。す

¹³ トマスは《引用1》において、欲求の内に生じる円環運動の手掛かりをアリストテレスの『魂について』の一節に求めていた。しかしながら、この円環運動を巡っては、《引用1》と『魂について』の間には若干の相違があるように思われる。実際、Leonina版は《引用1》における『魂について』の参照箇所を第3巻第10章n.8とし、Marietti版も433b22-27とLeonina版と同じ箇所を指定している。Marietti版が参照を促す『魂について』の当該箇所はアリストテレスが欲求対象から欲求能力、そして動物へと至る働きかけの系列に対する説明を背景とし、動物を場所的に動かすところの器官（心臓）の働きに焦点を当てられている。その際、心臓とその周辺の身体的諸部分の関係を巡って、身体において固定された心臓からの働きかけを受けた身体的な諸部分がその周囲を回るという仕方での円環運動が考えられている。他方、トマスが《引用1》において念頭に置いているのは、《図1》にあるように、欲求対象と欲求能力を円の両端に置き、欲求対象が基点となって欲求能力に働きかけることで、欲求能力を自身のもとへと引き寄せるといふ仕方での円環運動である。それゆえ、トマスの《引用1》における欲求の円環運動の理解をそのままの仕方ですべて『魂について』の当該箇所を求めることはできない。

アルベルトゥスの『ニコマコス倫理学注解』の一節にはこうしたトマスの理解と同種のものが見出される。Albertus Magnus, *Super Ethica*, lib.2, lect.5, sol.: ut dicitur in *III de anima*, in motu appetitus est quidam circulus, qui quodammodo clauditur ad rem extra, dum res movet sensum, ex quo relinquitur motus in phantasia, quae movet appetitivam, et haec movet motivam, quae est in lacertis affixa, et haec movet membra motu processivo, quo coniungitur desideratae rei, quae primo movet.

なわち、欲求対象が作用者として働きかけることで、受動者である感覚的欲求の内にまず適合性や好感が与えられるわけであるが、それが「愛 (amor)」という情念であると言われている。次いで、そうした働きかけを受けた欲求が自身の内に生じた愛という情念を運動の始点・根源として欲求対象へと向かうときに生じるのが「欲望 (desiderium)」である。そして、こうした欲求の回帰的な運動が欲求対象に到達することによって静止へと至るならば、そこに「喜び (gaudium)」が生まれることになる。そうして、愛、欲望、喜びの三つの情念は、欲求対象の働きかけによって生じた欲求的な運動における運動の始点・根源、運動、静止としてそれぞれ位置付けられるわけである。

こうした欲求的な運動とそれに付随して生じる上記三つの情念の関係を図式化してみるのであれば、次の《図1》のように纏め直すことができるであろう。



《図1》欲求の円環的な運動と情念（愛・欲望・喜び）の関係

アルベルトゥスのこの注解は Torrell, pp.24-27 の伝記的研究が明かすように、トマスがケルンに滞在していた 1248-52 年頃に著されたものであり、トマスはこの注解から上記のような理解を学んだのかもしれない。しかし、上記のアルベルトゥスのテキストにおいて、Münster 版の編者は円環運動に関する参照箇所を『魂について』第 3 巻第 10 章 433b10sq. に求め、トマスよりも広い範囲で取っている。また、《引用 1》と同様に『魂について』の当該箇所をもとに円環的な運動について触れたトマスのテキストとして Q. de veritate, q.1, a.2, c. があるが、そこでは Leonina 版の編者は、欲求対象から欲求能力、動物への働きかけの推移の説明が始まる 433b14 を

さて、こうした運動の始点・根源としての愛の位置付けは、諸情念におけるその根源性を再確認させる。つまり、《図1》に見られるように、欲望と喜びはそれぞれ欲求対象へと向かう運動や運動の静止として位置付けられる限りで、運動の始点・根源にあるものとしての愛の存在を前提にしている。言い換えれば、トマスにおいて、人が何かを欲望したり、それに喜びを抱いたりするといった事態は、そのものに対する愛がなければ起こり得ないわけである¹⁴。もっとも、こうした諸情念における愛の根源性という考え自体は、中世の神学者一般に求められるものであって、先のアルベルトゥスも『善について』の中で、「愛は愛以外の情念の基礎であると共に、根源である。実際、愛の対象以外には希望を抱かないし、愛の対象から切り離されるのでなければ、恐怖することもない。そして、その対象が愛の対象に対立しているからこそ、それに悲しみを抱くのである」と述べている¹⁵。しかし、その種の理解は愛が個々の情念の根底に

参照箇所としている。Cf. *Q. de veritate*, q.1, a.2, c.: sed motus appetitivae terminatur ad res; inde est quod philosophus in *III de anima* ponit circulum quemdam in actibus animae, secundum, scilicet, quod res quae est extra animam, movet intellectum, et res intellecta movet appetitum, et appetitus tendit ad hoc ut perveniat ad rem a qua motus inceptit.

¹⁴ こうした愛の先行性は、憎しみや忌避、悲しみといった他の情念との関係を考える上でも同様である。つまり、対象が悪として認識されるとき、欲求はそこから遠ざかろうと運動を展開する。その際、上記三つの情念は、運動の始点、運動、静止としてそれぞれに位置付けられる。しかし、そこで運動の始点として位置付けられる憎しみについて見た際、憎しみとは人が或る対象に対して抱く「不調和 (dissonantia) を意味するものである以上、それは自身に何らかの対象に対して抱く「調和 (consonantia)」つまり愛を前提にしているとされる。S.T.1-2, q.29, a.2, c.

¹⁵ Albertus, *De bono*, tract.3, q.5, a.1, ad 12: amor fundamentum et radix est aliarum. Non enim speratur, nisi quod amatur, nec timetur, nisi quod separat ab amto, nec aliquid contristat, nisi inquantum amato contrariatur; Albertus, *Super Ioannem*, c.15, 12, p.565: dicit Augustinus, quod cum quatuor sint affectus naturales, scilicet, spes, timor, gaudium, et tristitia: quod omnes causantur ex amore. Et ideo primus affectus est amor dilectionis sive caritatis. ここでアルベルトゥスが述べているように、こうした愛の根源性という考えの起源は、アウグスティヌスに求められる。Augustinus, *De Civitate Dei*, lib.14, c.7. もっとも、Guldentops, pp.46-

あることを説明するものでありつつも、愛以外の情念が持つ相互の繋がりを欠いてしまう。その意味で、受動を形相とそれに伴う運動という点から理解するトマスの《引用1》は、愛、欲望、喜びといった個々の情念を一つの連なりのもとに位置付けるものであるわけである¹⁶。

3. 愛が語られる射程：自然本性的な愛と感覚的な愛の連続性と断絶

さて、ここからトマスにおける魂の内に生じる情念としての愛、つまり感覚的な愛の内実の検討に入っていく。まず感覚的な愛と自然本性的な愛の相違に注目してみよう。

ところで、先の《引用1》において、トマスは自然的な物体を手掛かりとする自然本性的な愛と、感覚的欲求の内に生じる感覚的な愛を対比的に取り扱い、愛を「欲求対象へと向かう運動の始点・根源」に当たるものとして位置付けていた。こうした運動の始点・根源としての愛の位置付けは、愛という語が用いられる範囲を確かに拡大させる。つまり、「自然的な物体が大地の中心を愛する」という表現はトマスにおいて許容される。もっとも、ここでトマスが述べる自然本性的な愛は自然的な物体が持つところのそれに限られたものではない。先の《引用1》の前項(1-2, q.26, a.1, c.)は「愛は欲情の内にあるか」を問うものであるが、そこでトマスは、諸々の愛において自然本性的な愛は植物的な魂の内にあるものであるから、愛は欲情という感覚的な魂の内にあると端的に言うことはできないとする異論の立場に対して¹⁷、自然本性的な愛は、植物的な魂や感覚的な魂を内に含めた魂のあらゆる能力や、更には物体のあ

47 によれば、欲望や快を愛の原因とするなど、アルベルトゥスにおける諸情念の中の愛の位置付けについては揺らぎがあるという。

¹⁶ 情念の基本的な分類やその数自体はトマスのオリジナルではない。むしろ、Knuutilla, 2002, pp.200-201, 234, 243 によれば、自然学的な運動をモデルとして諸情念の関係を整理したことにトマスの独創性がある。

¹⁷ S.T.1-2, q.26, a.1, arg.3: Dionysius, in IV cap. *de Div. Nom.*, ponit quendam amorem naturalem. Sed amor naturalis magis videtur pertinere ad vires naturales, quae sunt animae vegetabilis. Ergo amor non simpliciter est in concupiscibili.

らゆる部分の内に普遍的な仕方で存在していると答えている¹⁸。それゆえ、ここでトマスが自然本性的な愛と言うときに念頭に置いているのは、自然的な物体を事例としつつも、人間を含めた個々のものの根底に据えられるところのものであると言える。《引用1》においてトマスが自然本性的な愛を語る上で自然的な物体を事例としているのは、自然本性的な愛は知性や感覚といった完全性によらずに個々のものの基底に位置付けられるものであるから、この点に知性や感覚を持たない自然的な物体を事例とすることの適切さを感じてのことであろう。しかしながら、そこで用いられる「愛」という語の内実を巡っては、こうした自然本性的な愛と感覚的な愛の間に少なからぬ隔たりが存在しているように思われる。実際、先の《引用1》において、トマスは自然本性的な愛について語る上で、注意深く言葉を選び、それを「或る意味において愛と言うことができる (potest quodammodo dici...)」と述べていたのである。

トマスが自然本性的な愛に対して用いる上記のような表現は、『神学大全』第1-2部の他の箇所からも確認することができる。実際、この《引用1》の前項(1-2, q.26, a.1, c.)において、愛がその基体を担う欲求能力の相違に応じて種別化される中で、トマスはこの自然本性的な愛を巡って幾分か慎重な語り口を見せているのである。

《引用2》ところで、これらの欲求(自然本性的な欲求、感覚的な欲求、理性的ないし知性的な欲求)のいずれにあっても、愛は愛される目的を目指す運動の根源であるところのものと言われる。つまり、自然本性的な欲求において、こうした運動の根源は欲求するものが自身の目指すところのものに対して持つ自然本性に適った状態 (connaturalitas) であり、これは自然本性的な愛と言われることができる。ちょうど、重い物体が中心という場所に対して持つその状態は重さによる

¹⁸ S.T.1-2, q.26, a.1, ad.3: amor naturalis non solum est in viribus animae vegetativae, sed in omnibus potentiis animae, et etiam in omnibus partibus corporis, et universaliter in omnibus rebus, quia, ut Dionysius dicit, IV cap. *de Div. Nom.*, omnibus est pulchrum et bonum amabile; cum unaquaeque res habeat connaturalitatem ad id quod est sibi conveniens secundum suam naturam; 1, q.80, a.1, ad 3.

のであるが、それが自然本性的な愛と言われることができるように。同様にまた、感覚的な欲求や意志が何らかの善に対して持つ適合性 (coaptatio)、すなわち善に対する好感 (complacentia boni) がそれぞれ感覚的な愛や、知性的ないし理性的な愛と言われるのである¹⁹。

上記のテキストは欲求能力と愛の関係を焦点としたものであるが、そこで愛は自然本性的な欲求、感覚的な欲求、知性的ないし理性的な欲求のいずれにおいても運動の根源として同様の仕方で考えることができると言われている。こうした運動の根源としての愛の説明は、先の《引用1》にも見られたものであり、その説明は基本的に変わるところがない。そして、その内の自然本性的な愛に対するトマスの語り口にも、先の《引用1》と同様に、自然本性的な愛を愛と呼ぶことに対する或る種の躊躇いがあるように思われる。実際、上記のテキストにおいて、トマスは「自然本性的な欲求において、こうした（愛の対象となる目的を目指す）運動の根源は欲求するものが自身の目指すところのものに対して持つ自然本性に適った状態であり、これは自然本性的な愛と言われることができる (potest dici amor naturalis)」と述べており、感覚的な愛や知性的ないし理性的な愛に対して述べられているような「愛と言われる (dicitur amor)」という表現はそこには見られない。

さて、こうした二つのテキストに共通して登場する上記の表現は、トマスが自然本性的な愛を愛と呼ぶに当たって或る躊躇いを持っていたことを明らかに示している。ここで暫し足を止め、トマスが自然本性的な愛に対してこの種の表現を用いる理由について考えてみよう。こうした上記のような表現に対する問い掛けは、トマスにおいて、愛というもの

¹⁹ S.T.1-2, q.26, a.1, c.: In unoquoque autem horum appetituum, amor dicitur illud quod est principium motus tendentis in finem amatum. In appetitu autem naturali, principium huiusmodi motus est connaturalitas appetentis ad id in quod tendit, quae dici potest amor naturalis, sicut ipsa connaturalitas corporis gravis ad locum medium est per gravitatem, et potest dici amor naturalis. Et similiter coaptatio appetitus sensitivi, vel voluntatis, ad aliquod bonum, idest ipsa complacentia boni, dicitur amor sensitivus, vel intellectivus seu rationalis.

が語られる本来的な文脈を明らかにするものであると共に、上述の三つの欲求の相違に応じて区別される諸々の愛の中での魂の情念としての愛、つまりは感覚的な愛の位置付けをより明確なものにするように思われるからである。

4. 認識と欲求の結節点としての愛：自然本性的な愛と感覚的な愛の内部構造

ところで、スペインのトミストである Ramírez は、《引用1》、《引用2》を含めた第26問題全体に対する注解の中で「認識能力の介在」ということをもとに自然本性的な愛と感覚的な愛の構造を対比し、自然本性的な愛に対して上述の表現が用いられる理由を説明している。そこでの Ramírez の説明は必ずしも十分な分量をもって語られているものではないが、次のように纏め直すことができるだろう。すなわち、感覚的欲求においてその欲求対象の位置に置かれるものは可感的な善である。しかし、善が欲求対象となるのはその善が認識能力を通じて把握され、そうして把握された善が欲求能力を欲求対象へ向けて動かすことによってでしかない。それゆえ、欲求対象へと向かう運動の根源としての愛が感覚的欲求において成立するためには、まず認識能力によって対象の観念(intentio)が自らの内に受容され、次いで、そのようにして捉えられたものが「認識された善」として欲求能力に働きかけるという二段階が必要になる²⁰。それゆえ、人間の感覚的欲求の内に成立する愛に目を向けた場合、そこには認識と欲求が共働し、認識された善が欲求能力に働きか

²⁰ S.T.1-2, q.22, a.2, c.: in nomine passionis importatur quod patiens trahatur ad id quod est agentis. Magis autem trahitur anima ad rem per vim appetitivam quam per vim apprehensivam. (...) Vis autem apprehensiva non trahitur ad rem, secundum quod in seipsa est; sed cognoscit eam secundum intentionem rei, quam in se habet vel recipit secundum proprium modum. 受動という語は、受動者が作用者のもとへと引き寄せられるということを含意する限り、この語の特質は認識能力よりも欲求能力に見出される。しかし、認識能力がこうした受動の特質から完全に除外されているわけではない。Miner, pp.34-35 はここでの「より一層(magis)」という言葉に注意を喚起する。

けることで、自己を自ら欲求対象へ向けて傾けているという事態があるわけである。こうした感覚的な愛が成立するまでのプロセスに関する Ramírez の説明が妥当なものであることは、先の《引用 1》に置かれていた『魂について』の当該箇所からも確認することができる。実際、そこで引用される『魂について』の当該箇所は、動物を場所的に動かすところの能力が魂において問題となる文脈に当たり、善が認識能力を通じて把握された上で欲求を動かし、更にそうした運動の連なりが動物に対しても繋げられていくというプロセスが考えられている²¹。

他方、自然的な物体の事例をもとに自然本性的な愛の構造に目を向けた場合、Ramírez によれば、作用者からの働きかけは、上記のような受容のプロセスを採らない。自然的な物体は人間や動物のように認識能力を持たず、作用者からの働きかけを自身の物体性をもとに直接的な仕方で受け取っているに過ぎないからである。つまり、自然的な物体は、物体を生むものによって与えられた自然的形相をもとに、自身が向かうべき対象を自ら認識することなく、ただ他動的な仕方で対象へと向けられているに過ぎないのである。それゆえ、Ramírez は上述の議論の後で、愛が本来的な意味において語られるためには認識を通じて自己を自ら欲求対象へと秩序付けることが必要であるとした上で、「自然本性的な愛や生来的な愛が愛と語られるのは本来的な仕方や厳密な意味においてではなく、むしろ、ただの転喻的な仕方に過ぎず、また、或る種の転用によ

²¹ *Sentencia libri De anima*, lib.3, lect.15, n.831: Deinde cum dicit quoniam autem assignat ordinem motus; et dicit quod tria sunt quae inveniuntur in motu. Unum, quod est movens, et aliud est organum quo movens movet, et tertium est quod movetur. Movens autem est duplex: unum quidem immobile, et aliud quod est movens motum. In motu igitur animalis, movens quod non movetur, est bonum actuale, quod movet appetitum prout est intellectum vel imaginatum. Sed movens motum, est ipse appetitus; quia omne quod appetit, inquantum appetit movetur, et ipsum appetere est quidam actus vel motus, prout motus est actus perfecti, prout dictum est de operatione sensus et intellectus. Quod autem movetur est animal.

る」と言うのである²²。

何らかの対象を愛するためにはそのものを認識している必要があるということ、トマスが愛の原因を問題にする際にも度々語るところのことであり²³、認識能力の介在という点から愛という語の本来的な用法を確定させようとする Ramírez の説明は概ね正しいもののように思われる。しかしながら、こうした Ramírez の説明は、愛が語られる本来的な文脈を明らかにするとしても、認識によらずに成立するはずの自然本性的な欲求にまで愛という語が用いられる理由を明らかにするものではない。つまり、彼自身が述べるところの転喻的な仕方や転用の実際を説明するものではない。確かに、先に引用した《引用 1》と《引用 2》のテキストにおいて述べられていたように、トマスにおいて愛は欲求対象へと向かう運動の根源として位置付けられ、このことが自然本性的な欲求に対して愛という語を用いる基盤となっていた。しかし、そうした自然本性的な愛がその対象に対する認識を伴わずに成立するのだとしたら、愛の成立のためには認識が必要であるというトマスの主張との間に齟齬が生じてしまうように思われる。

こうした自然本性的な愛と認識の関係を巡る我々の疑問は、『神学大全』第 1-2 部において「認識は愛の原因であるか」を問う文脈に置かれた次の異論の内にも見出だすことができる。上記の設問に対するトマスの立場はそれを肯定するものであるが、異論の論者は次のように述べている。

《引用 3》もしも認識が愛の原因であったとすれば、認識のないところには愛も見出されないはずである。ところで、擬ディオニュシオスが『神名論』第 4 章で述べるように、愛はあらゆるものの内に見出される

²² Ramírez, pp.87-89, esp.89: (···) Amor ergo non potest proprie et stricte dici de amore innato vel naturali, sed metaphorice tantum et per translationem quamdam.

²³ S.T.1-2, q.27, a.2, c.: bonum est causa amoris per modum obiecti. Bonum autem non est obiectum appetitus, nisi prout est apprehensum. Et ideo amor requirit aliquam apprehensionem boni quod amatur; 1-2, q.27, a.1, c.

わけであるが、認識は必ずしもあらゆるものの内に見出されるわけではない。したがって、認識は愛の原因ではない²⁴。

上記における異論の論旨は明快である。すなわち、愛とはあらゆるものの内に見出されるものであるが、もしも認識が愛の原因であったとすれば、愛が見出されるところには必ず認識も見出されるはずである。しかし、そこに愛が見出されたとしても、認識が見出されないような事物も存在している。それゆえ、認識を愛の原因として考えることは適当ではない。こうした認識と愛のそれぞれが及ぶ範囲の不均等を問題とする異論の立場に対して、トマスは自然的な物体が確かにそうした事物であることを認めている。しかし、そうであったとしても、そこに欲求対象に対する認識が全く存在しないというわけではないとトマスは言う。むしろ、トマスはそこでの認識はその愛を持つものの外、つまり自然的な物体を造った「自然の設立者 (*instituens naturae*)」である神の内に見出していると言うのである²⁵。すなわち、この自然本性的な愛において、

²⁴ S.T.1-2, q.27, a.2, arg.3: si cognitio esset causa amoris, non posset inveniri amor ubi non est cognitio. Sed in omnibus rebus invenitur amor, ut dicit Dionysius in IV cap. *de Div. Nom.*, non autem in omnibus invenitur cognitio. Ergo cognitio non est causa amoris. 擬ディオニュシオスは『神名論』の中で、あらゆるものの内に愛が見出されると何度か述べているが (n.180, 182), トマスはその注解において、擬ディオニュシオスの言葉を頼りに、神の愛、天使の愛、知性的な愛、感覚的な愛、自然本性的な愛という5つの愛を区別し、この内の自然本性的な愛の内に、栄養的な部分に関わる限りでの動物、植物、魂を持たない事物の持つ愛を含めている。Cf. *In de divinis nominibus*, C.4, lect.12, n.454: quintus est naturalis qui pertinet ad appetitum naturalem, sive in animalibus quantum ad nutritivam partem sive in plantis sive etiam in rebus inanimatis. こうした自然的な事物の持つ重さの内に愛の存在を見出すトマスの理解は、「私の重さは私の愛である」というアウグスティヌスの『告白』の一節 (lib.13, C.9) を思い起こさせるが、この点に対してトマスの内にアウグスティヌスに対する言及は見られない。アウグスティヌスの当該箇所の引用は例えば Q. *de virtutibus*, q.2, a.8, arg.6 などに見出される。

²⁵ S.T.1-2, q.27, a.2, ad 3: dicendum quod etiam amor naturalis, qui est in omnibus rebus, causatur ex aliqua cognitione, non quidem in ipsis rebus

神は自然的な物体の到達すべき対象を予め認識した上でそのものに対して自然的形相を与えている。そして、自然的な物体はそうして与えられた形相に基づいて自身が向かうべき対象にまで秩序付けられているのである²⁶。それゆえ、自然本性的な愛であっても、トマスによれば、そこに自身の外部に位置する者による認識が存在している以上、その愛は認識をもとに成立しているというわけである。

そこで、自然本性的な愛と感覚的な愛における愛という語の内実の相違も、そうした愛を持つ存在の認識能力に対する関わり方の相違から説明することができるのかもしれない。すなわち、トマスにおいて愛とは欲求対象へと向かう運動の根源として位置付けられるものであったが、そうした運動の根源としての在り方が可能となるためには、そもそも欲求対象が自身の向かうべき対象として認識される必要がある。そして、その認識が欲求対象へと向かっていく当のもの自身、つまり「自己自身」によって行われるという場合、その愛は本来的な意味での愛と言える²⁷。

naturalibus existente, sed in eo qui naturam instituit, ut supra dictum est; q.26, a.1, c.

²⁶ S.T.1-2, q.26, a.1, c.: Unde secundum differentiam appetitus est differentia amoris. Est enim quidam appetitus non consequens apprehensionem ipsius appetentis, sed alterius, et huiusmodi dicitur appetitus naturalis. Res enim naturales appetunt quod eis convenit secundum suam naturam, non per apprehensionem propriam, sed per apprehensionem instituentis naturam.

²⁷ こうした愛の本来的・非本来的用法について明示的な仕方で述べたテキストは『神学大全』の情念論の内には見られないが、『命題集注解』には我々が本節で述べてきたことを確かなものとする次の一節がある。In 3 Sent. d.27, q.1, a.4, ad 13: amor, proprie loquendo, non est nisi in illis in quibus est cognitio; sed amoris nomen transmittitur ad ea ad quae cognitionis nomen extendi non potest: quia amor dicitur secundum quod amans ad rem aliam ordinatur; aliquid autem ad alterum ordinari potest etiam ab exteriori ordinante; et ideo illa quae ad aliquid ordinantur ab habentibus cognitionem (quorum proprie est amor, inquantum ex seipsis ad amata ordinantur) nomen amoris vel appetitus recipere possunt. ここでの異論の立場は擬ディオニュシオスの『神名論』第5章の「多くのものの内に見出されるものは、より単純なものであり、より高貴なものである」

我々が本稿を通じて見ている感覚的な愛が属するのは、こうした事態である。しかし、愛というものが語られるためには、その認識を行うものが必ずしも「自分自身」であるような必要はなく、自身にとっては外的な「他者」であるような場合であっても、そこに愛という語を用いることは可能であるというわけである。そして、自然本性的な愛はこの後者の在り方に属し、自身が向かうべき対象が自身の本性に適った善であると認識することなく、ただ他動的な仕方に対象へと向けられているに過ぎないことのために、前節で見たような表現と共に語られることへと繋がっていたのである。

しかしながら、認識を通じて自らを愛の対象へと秩序付けるということが感覚的な愛の場合において余りに強調され過ぎてはならない。確かに、この感覚的な愛は自然本性的な愛とは異なり、認識能力と欲求能力が共働することで自らを欲求対象へと秩序付けているのであるが、更に上位に位置する知性的ないし理性的な愛のように、欲求対象からの働きかけに理性の力を通じて同意し、そこへと向かうか否かを自ら決定しているわけではないからである。その意味で、この愛における欲求対象への秩序付け自体は、自然本性的な愛と同様に「必然的な仕方」で(ex necessitate)生じるもののなのである。もっとも、この感覚的欲求の内に成立する愛を人間の理性的魂の内に包含されるものとして捉えるのであれば、この愛も理性に服属するものとして「幾分かの自由(aliquid libertatis)」を有すると考えられる²⁸。そして、こうした点から感覚的な愛を見るのであれば、この愛を非理性的な諸動物の持つそれから区別される「人間的な愛」として捉えることができるのかもしれない。

さて、以上に見たように、自然本性的な愛に対して用いられていた上

という一節をもとに、愛は認識よりも一層多くのものに見出されるが故に、愛は認識よりも優れていると言うものである。トマスは認識と愛の及ぶ範囲という点に限り、異論の立場を認め、上記のように答えている。Cf. *In 3 Sent.* d.27, q.1, a.4, arg.13

²⁸ *S.T.*1-2, q.26, a.1, c.: Alius autem est appetitus consequens apprehensionem ipsius appetentis, sed ex necessitate, non ex iudicio libero. Et talis est appetitus sensitivus in brutis, qui tamen in hominibus aliquid libertatis participat, inquantum obedit rationi; 1-2, q.15, aa3-4.

述の表現への問い掛けは、愛が本来の意味で語られる文脈、そして、その中における感覚的な愛の位置付けを明確にする。すなわち、トマスにおいて愛とは認識と欲求の言わば結節点に置かれるべきものであり、愛が本来の意味で語られるためには、そうした認識能力と欲求能力が同一の存在者の内に帰属することが求められていた。そして、この感覚的な愛に属するのは、認識能力を通じて把握された対象が欲求能力に働きかけることで、欲求が「必然的な仕方」で欲求対象へと傾けられるという事態なのであった。しかしながら、こうした働きかけを被るとき、欲求の内にはどのような変化の状態が生まれているのだろうか。次に、我々はこの情念論においてトマスが愛の内実を表す上で用いる用語に注目することで、欲求対象という作用者からの働きかけを受け取る受動者としての欲求の在り方に目を向け、愛という情念の持つ内実をより明瞭なものにしてみよう。

5. 愛を巡るトマスの用語法：connaturalitas, coaptatio, complacentia boni…

ところで、トマスは『神学大全』第1-2部の「情念論(qq.22-48)」において、愛の内実を表すに当たって実に多くの用語を用いている。実際、そこで登場する用語を挙げてみても、coaptatioやcomplacentia, connaturalitas, convenientia, consonantia, proportio, aptitudo, inclinatioといった8つの語が愛の内実を表すものとして用いられている²⁹。トマスが愛に対して用いる用語とその用語が用いられる箇所を、この情念論をもとに挙げてみれば以下のように纏めることができる。

²⁹ 愛の内実を表す上でトマスが用いる用語は発展史的に理解されることが多い。すなわち、Simonin, pp.179-194やMalloy, 2007, pp.65-87, Sherwin, pp.64-81らの諸研究が等しく指摘するように、『命題集注解』において愛は「静止(quies, quietatio)」や「終極(terminus)」といった静的な装いを持った語で表されるのに対し、『神名論注解』、『神学大全』においてはinclinatioやcomplacentiaをはじめとする語によってその動的な性格が強調されている。こうした理解は、先の《図1》に見られるような運動の始点・根源としての愛の理解に由来するものであるが、『命題集注解』第3巻第27区分において用いられる用語は次の通りである。

() 内の数字は、左欄は全体、右欄は各項におけるその語の使用回数である。

-
- quies, quietatio d.27, q.1, a.3, c. et ad 1; q.2, a.1, c.
 - terminatio d.27, q.1, a.2, c.; 3, c. et ad 1.
 - complacens d.27, q.1, a.1, c. et ad 3.
 - connaturale d.27, q.1, a.3, ad 2.
 - convenientia d.27, q.1, a.1, c. et ad 2, ad 3; a.3, ad 2.

もっとも、愛という情念が欲求対象による感覚的欲求への働きかけによって生じるという理解は、『命題集注解』のテキストにおいても変わらない。*In 3 Sent.*, d.27, q.1, a.3, c.: *inter alias affectiones animae amor est prior. Amor enim dicit terminationem affectus per hoc quod informatur suo objecto. In omnibus autem hoc invenitur quod motus procedit a primo immobili quieto: quod quidem patet in naturalibus: quia primum movens in quolibet genere est non motum illo genere motus, sicut primum alterans est non alteratum. (….) Cum ergo affectus informetur et terminetur amore, (….) oportet quod omnis motus affectivae procedat ex quietatione et terminatione amoris.* しかし、このテキストにおいて、トマスはそうした欲求対象の働きかけによって欲求能力の内に愛が成立することを一つの運動と見なし、愛をそうした運動の終極や停止と位置付ける。そして、その上で、情感の全ての運動は静止する第一のもの、つまりは愛から生じるのでなければならぬと述べている。しかし、愛が静止的なものとして位置付けられてしまえば、喜びとの重複を生んでしまうわけであって、Malloy, 2007, p.83 は運動の始原から運動それ自体、静止へと至る自然学的な運動のモデルをもとに愛、欲望、喜びといった情念を位置付ける後期トマスにおける思索の深まりを読み取ろうとする。実際、Malloy の危惧するように、この『命題集注解』においても、喜び(快)は静止として捉えられている。*In 3 Sent.*, d.27, q.1, a.2, ad 3: *delectatio causatur ex conjunctione convenientis. Conveniens enim adveniens perficit id cui advenit, et quietat inclinationem in illud; et haec quietatio, secundum quod est percepta, est delectatio.*

こうした執筆活動を開始して間もない時期のトマスの用語は、アルベルトゥスの用いるそれに近いものであり、上述の用語の移行はアルベルトゥス的な愛の枠組みからの脱却を意味するものとして読み解くことができるのかもしれない。実際、アルベルトゥスにおいて、愛は愛の対象における情感の停止 (*quietas affectus*) として度々表現されているからである。Albertus, *Super de divinis nominibus*, c.4 (p.216, ll.64 – 65): *amor dicit*

用 語	登 場 箇 所
aptitudo (9)	q.23, a.4, c. (3); q.25, a.2, c. (2) et ad 2 (1); q.25, a.3, c. (2); q.29, a.1, c. (1)
coaptatio (5)	q.26, a.1, c. (1); q.26, a.2, c. (1); q.27, a.4, c. (1); q.28, a.1, ad 2 (1); q.28, a.5, c. (1)
complacentia (10)	q.25, a.2, c. (1); q.26, a.1, c. (1); q.26, a.2, c. (3) et ad 2 (1); q.27, a.1, c. (1); q.28, a.2, c. (2) et ad 1 (1)
connaturalitas (8)	q.23, a.4, c. (1); q.26, a.1, c. (2) et ad 3 (1); q.26, a.2, c. (1); q.27, a.1, c. (1); q.32, a.3, ad 3 (1)
consonantia (2)	q.29, a.1, c. (2)
convenientia (3)	q.28, a.1, ad 2 (1); q.28, a.5, c. (1); q.29, a.2, c. (1)
inclinatio (6)	q.23, a.4, c. (3); q.25, a.2, ad 2 (1); q.36, a.2, c. (1) et ad 1 (1)
proportio (5)	q.25, a.2, c. (2) et ad 2 (1); q.25, a.3, c. (2)

《表1》情念論 (1-2, qq.22-48) における愛を表す用語と登場箇所

トマスが愛の内実を表すに当たって上記の《表1》に見られるような多くの語を用いる理由は必ずしも判然としない。本稿の冒頭でも既に述べたように、トマスが上記のような多くの用語を用いていることは、トマス研究者からもときに「奇妙な揺らぎ」として受け止められる。そして、その種の理解によれば、愛という情念を上記の用語と共に形而上学的、ないしは心的な側面から分析しようとするトマスの態度は、彼以前の中世の思想家には見られないものであるとされる一方で³⁰、欲望や喜

quietatem affectus in suo obiecto. Cf. Thomas, *In 3 Sent.*, d.27, q.2, a.1, c.: amor tamen super quatuor praedicta aliquid addit, scilicet quietationem appetitus in re amata.

³⁰ すなわち、Simonin, p.178 は、オセールのギヨームやアルベルトゥスらの名前を挙げ、トマスの先達となる神学者らにおける愛に関する取扱いの不足を原因として指摘した上で、アリストテレス的な用語と共に愛の内実を浮かび上がらせようとするトマスの試みを革新的と表現している。Simonin, p.178: On peut ainsi parler, dans un sens restreint, mais réel, d'une certaine évolution dans la pensée de saint Thomas touchant la doctrine de l'amour. こうした Simonin の指摘は次のような理解と対立するものではない。つまり、山本, 2013 年, 152-156 頁は、トマスが上記のような多くの語を用いる理由に関して、『神学大全』第1部の聖霊論のテキ

びといった他の情念に先立ち欲求の内に生じた「最初の／根源的な変化 (prima immutatio)」としての愛の内実を確定的な用語で捉えることにトマスは困難を感じていたとも言われるのである³¹。

しかしながら、上記の語は一見無造作に用いられているように見えながらも、そこには或る共通点が存在している。実際、Gudaniec がこれらの語の多くに現れる con- (co-, com-) —— それは cum という前置詞に由来する —— という接頭辞に注目して述べるように、これらの用語は欲求対象からの働きかけを通じて欲求が欲求対象にとって親和的なものとなり、両者の間に何らかの結び付きが生まれたことを示唆するという点で基本的に一致している³²。その意味で、トマスがこれらの語を通じて一貫して見取っているのは、そうした欲求と欲求対象との間に芽生えた親密な関係や両者の近い結び付きであると言える。その際、愛という情念の内実がこのような欲求と欲求対象の親和的な関係を想起させる語を伴って表されることは、欲求対象が「善 (bonum)」として捉えられていることに理由がある。すなわち、個々のものが自然本性的に希求するのは常に善であるが、或る対象が善として把握され、それが欲求に提示されることで、欲求と欲求対象の間には上述のような親和的な状態が形成されるわけである。反対に、対象が悪として認識される場合、そこに形成されるのは、自己との「不調和 (dissonantia)」という対立的な関係である³³。

スト (q.37, a.1, c.) を手掛かりとして、トマスが愛の内実を表す上で用語の不足を感じていたことを指摘している。すなわち、知性認識の場面において用いられる「言葉 (verbum)」や「語ること (dicere)」という語が認識者の認識対象に対する関わり、或いはその逆の関わりという二つの関係を意味するものであるのに対し、愛の場面においてはそうした用語に対応する日常言語が存在せず、このことがトマスにおいて上述のような多様な用語が用いられる背景に繋がっているのではないかと推測している。

³¹ こうした理解は Kwasniewski, 2002, pp.120-121 による。

³² Gudaniec, p.500.

³³ 愛の対極に位置する憎しみ (odium) という情念との対比は、こうした愛によって生じる欲求と欲求対象の間の関係をより明瞭なものにする。実際、憎しみの対象は悪であり、それが有害なものや背馳的なものとして認識を通じて欲求に提示されることで欲求と欲求対象の間には不調和が生じる。

そこで、こうした理解をもとに上記の用語の相違に目を向けてみるのであれば、これらの用語は *sive* (*seu*) や *vel* といった語で結ばれた形で現れることが多いため、その個々の意味を確定させていくことは確かに難しい³⁴。例えば、「善は自身に対する傾きや適性、自然本性に適った状態 (*inclinatio, seu aptitudo, seu connaturalitas*) を欲求能力の内にまづ原因するのであるが、これが愛という情念に属する」と言われ、これらの語の共通的な側面が意識されているような箇所もある³⁵。しかしながら、これらの用語が個々用いられている文脈を注意深く見つめてみるのであれば、これらの用語は確かに相互に似通ったものでありながらも、それが用いられる文脈や力点の相違に応じて或る程度の使い分けがなされ、そこにこれらの語を通じて愛という情念の多様な表情を捉えようとするトマスの思索の一端を見取ることができるように思われる³⁶。ここ

S.T. 1-2, q.29, a.1, c.: Sic igitur et in appetitu animali, seu in intellectivo, amor est consonantia quaedam appetitus ad id quod apprehenditur ut conveniens, odium vero est dissonantia quaedam appetitus ad id quod apprehenditur ut repugnans et nocivum. Sicut autem omne conveniens, in quantum huiusmodi, habet rationem boni; ita omne repugnans, in quantum huiusmodi, habet rationem mali. Et ideo, sicut bonum est obiectum amoris, ita malum est obiectum odii.

³⁴ Lombardo, pp.57-58. Lombardo はこれらの用語が興味深いものでありつつも、これらの用語からトマスの語る愛の内実を取り出すことは困難であると述べ、他の情念との対比という点からその内実を浮かび上がらせようと試みている (pp.57-62)。しかし、本節で見ていくように、これらの用語はそれが用いられる文脈によって或る程度使い分けがなされ、とりわけ, *complacentia* という語の内には愛の対象へと向かっていこうとする愛の動的な在り方が示されている。

³⁵ S.T.1-2, q.23, a.4, c.: Bonum ergo primo quidem in potentia appetitiva causat quamdam inclinationem, seu aptitudinem, seu connaturalitatem ad bonum, quod pertinet ad passionem amoris.

³⁶ 例えば, *consonantia* は愛の対極に位置する「憎しみ (*odium*)」という情念が取り上げられる際に集中して現れる語であるが、その際、トマスは *consonantia* と *dissonantia* を対比的に用いることで、愛と憎しみの対立関係を際立たせている。また、トマスは何ものも自身とは「釣り合いの取れていない目的 (*finis non proportionatus*)」へ向かうことはできないと述べた上で、*proportio* や *aptitudo* といった語を愛に当て、欲求が欲求対象へ

で先の《引用1》,《引用2》に戻り,そこで用いられている *connaturalitas*, *complacentia*, *coaptatio* という三つの用語に焦点を当て,それらが欲求と欲求対象のどのような関係を映し出すものであるのかを考えてみよう。《引用2》について,それを上記の用語が用いられる箇所に限って再掲してみるのであれば,以下のように述べられていた。

《引用2'》つまり,自然本性的な欲求において,こうした運動の始まりは欲求するものが自身の目指すところのものに対して持つ自然本性に適った状態 (*connaturalitas*) であり,これは自然本性的な愛と言われることができる。ちょうど,重い物体が中心という場所に対して持つその状態は重さによるのであるが,それが自然本性的な愛と言われることができるように。同様にまた,感覚的な欲求や意志が何らかの善に対して持つ適合性 (*coaptatio*),すなわち善に対する好感 (*complacentia boni*) がそれぞれ感覚的な愛や,知性的ないし理性的な愛と言われるのである³⁷。

さて,上記のテキストに見られるように,自然本性的な愛が「自然本性に適った状態 (*connaturalitas*)」という語で表されているのに対し,感覚的な愛や知性的ないし理性的な愛に対しては,「適合性 (*coaptatio*)」と「善に対する好感 (*complacentia boni*)」の二つの語が用いられている³⁸。こうしたそれぞれの愛に対して用いられる用語は,先の《引用1》

と向かう運動が可能になるための両者の釣り合いの取れた状態としての愛の在り方を浮かび上がらせている。S.T.1-2, q.29, a.1, c.; 1-2, q.25, a.2, c.

³⁷ S.T.1-2, q.26, a.1, c.: In appetitu autem naturali, principium huiusmodi motus est *connaturalitas* appetentis ad id in quod tendit, quae dici potest amor naturalis, sicut ipsa *connaturalitas* corporis gravis ad locum medium est per gravitatem, et potest dici amor naturalis. Et similiter *coaptatio* appetitus sensitivi, vel voluntatis, ad aliquod bonum, idest ipsa *complacentia boni*, dicitur amor sensitivus, vel intellectivus seu rationalis.

³⁸ これら二つの語の理解に関しては Simonin, p.192f. に倣う。すなわち, Simonin はその論考の中で『神学大全』の情念論において愛を表す上で登場する上述の用語の内 *coaptatio* と *complacentia* に特に焦点を当てている

でも繰り返し見られたところのものであり、そこに用語上の異同はない³⁹。もっとも、Ottawa 版では上記の《引用 2'》の五行目は、*“Et similiter aptatio appetitus sensitivi, vel voluntatis, ad aliquod bonum...”* となっており、Leonina 版において「適合性 (coaptatio)」とある箇所「適性 (aptatio)」という語が置かれている⁴⁰。ただし、aptatio という語は Leonina 版のアパルトゥスにも異読として登場するものの、先の《表 1》に見られるように『神学大全』の情念論には登場せず、また、『命題集注解』や『神名論注解』において愛を主題とする箇所を見渡してみてもその使用を確認することは出来ない⁴¹。

それでは、上記のテキストにおいて用いられている用語の内、自然本性的な愛に対して用いられている connaturalitas という語にまず注目してみよう。ところで、第 3 節で見たように、自然本性的な愛とは個々のものがその基層において欲求対象に対して持つ愛のことであったが、

が、彼によれば coaptatio という語は欲求対象からの働きかけによって全体的な変化を被り、欲求が対象へと向かうように方向付けられたことや適合させられたことを意味する。Simonin, p.192: Le mot coaptatio fait allusion à la modification entitative de l'appétit, à cette adaptation qu'il reçoit de l'objet et qui le porte à faire retour vers lui. また、complacentia は働きかけを被る欲求の心的な在り方が問題となっている。こうした理解は Gundanec, pp.500-501; Gallagher, 1996, p.10, nn.23-24 と一致する。

³⁹ 《引用 1》において connaturalitas という語は自然本性的な愛に対して明示的な仕方で用いられていないが、そこでは次のように述べられている。S.T.1-2, q.26, a.2, c.: Et ipsa gravitas, quae est principium motus ad locum connaturalem propter gravitatem, potest quodammodo dici amor naturalis. (下線による強調は筆者による。)

⁴⁰ Marietti 版も Leonina 版と同様に coaptaio という語を採用している。

⁴¹ 例えば、『神名論注解』では次のように述べられている。In *de divinis nominibus*, c.4, lect.9, n.401: Ex hoc igitur aliquid dicitur amari, quod appetitus amantis se habet ad illud sicut ad suum bonum. Ipsa igitur habitudo vel coaptatio appetitus ad aliquid velut ad suum bonum amor vocatur; lec.10, n.427: Prima autem operatio appetitus est amor, ut supra dictum est, unde amor importat primam inclinationem appetitus in rem secundum quod habet rationem boni, quod est obiectum appetitus. 『命題集注解』で用いられる用語については、注 28 でまとめた。

そこでそのものと欲求対象は、重い物体とそれが向かう中心という場所のように、自身の根底において分かち難く結び付いていると言える。実際、トマスは、「個々のものが自然本性に適った状態 (connaturalitas) を持つのは、自身の自然本性 (natura) に基づいて合致しているものに対してである」と述べ⁴²、そうした状態が形成される基盤を自然の設立者によって賦与された自身の自然本性と欲求対象との合致という点に置いている。その意味で、connaturalitas という語を通じて浮かび上がるのは、そのものの自然本性を基盤とした欲求対象との生来的な結び付きであって、上記のテキストにおいて、この語を自然本性的な愛に当てているのも、そうした自然本性的な愛における当のものの同士の結び付きの在り方にその理由があるのかもしれない。

こうした自然本性的な愛における欲求と欲求対象の結び付きの在り方は、coaptatio という語をもとに、感覚的な愛や知性的な愛におけるその在り方と対比することでより明瞭になる。すなわち、coaptatio という語は、上記のテキストの他に、『神学大全』の情念論全体の用例からしても、後述の complacentia と共に感覚的な愛や知性的な愛を対象とする用語であるが⁴³、Deferrari によるトマスの古典的な用語研究によれば、coaptatio はそれまで結び付きを持たなかった二つのものにおいて、一方のものが他方のものに適した状態で結合・接着すること (co-aptare) を意味するとされる⁴⁴。確かに、これまでにも見てきたように、自然本性

⁴² S.T.1-2, q.26, a.1, ad 3. unaquaeque res habeat connaturalitatem ad id quod est sibi conveniens secundum suam naturam; 1, q.60, a.1, ad 3.

⁴³ 『神学大全』の情念論において、自然本性的な愛に対して用いられている用語は、connaturalitas, inclinatio, aptitudo, consonantia の4語である。S.T.1-2, q.23, a.4, c.; q.26, a.1-2; q.29, a.1, c.

⁴⁴ Deferrari, p.161 は coaptatio の内実を表すものとして、to fit, join with something, compose of adjust, adapt という語を当てている。また、coaptatio という語が一方のものを他方のものに適した状態で結び付けるといような意味で用いられている箇所には、例えば以下のようなテキストがある。Q. de virtutibus, q.5, a.1, c.: Et ideo iustitia ex hac parte ponitur virtus principalis, per quam homo debito modo coaptatur et adaequatur aliis, cum quibus communicare habet; unde et vulgariter dicuntur iusta illa quae sunt debito modo coaptata; S.C.G. 4, c.82: Anima et corpus

的な欲求が自身に与えられた自然本性をもとに特定の対象へと定められているのに対し、感覚的な愛や知性的な愛は、感覚や知性によって捉えられる善の多様性に基づいて多くの対象へと拓かれている⁴⁵。つまりは、感覚的な愛や知性的な愛において、欲求と欲求対象の間には自然本性的な愛に見られるような特定の対象との結び付きは存在せず、むしろ、それらの愛はそれまで自身との関わりを持たなかった対象を感覚や知性を通じて善として認識することでその都度自身と欲求対象とを結び付けているわけである。そして、先の《引用 2'》において、感覚的な愛や知性的な愛の内実を表す上で、Leonina 版の編者が *aptatio* という語以上に *coaptatio* がトマスの真意に適っていると考えた理由もこうした点から説明することができるのかもしれない。実際、*aptatio* の強意語である *coaptatio* は、欲求と欲求対象の「結合」という点を強く示すものであるが、こうした *coaptatio* の意味は、自身の認識をもとに対象と結び付く上述のような感覚的な愛や知性的な愛の在り方を表す上で有効に機能するように思われるからである。

もっとも、こうした『神学大全』における情念論全体 (1-2, qq.22-48) を見渡してみるのであれば、*connaturalitas* という語が感覚的な愛や理性的な愛に用いられている箇所も確かにある。情念論においてそうした使用法が確認できるのは、以下の二つの箇所である。

《引用 4》ところで、欲求的な部分の運動において、善が言うなれば引き付ける力を持っているのに対し、悪は引き離す力を持っている。それゆえ、善は欲求的な能力の内に自身に対する或る種の傾きや適性、自然本性に適った状態 (*quaedam inclinatio, seu aptitudo, seu con-*

diverso ordine comparari videntur secundum primam hominis generationem, et secundum resurrectionem eiusdem. (...) praeparata enim materia corporali per virtutem decisi seminis, Deus animam creando infundit. In resurrectione autem corpus animae praeexistenti coaptatur.

⁴⁵ こうした視点からの自然本性的な欲求とその他の欲求の相違を巡っては、例えば、S.T.1, q.80, a.1, c. を参照。Cf. Cajetan, *Commentaria in 1-2*, q.19, a.1, n.6: *appetitus naturalis est ad unum: animalis vero ad multa, iuxta multitudinem apprehensorum bonorum.*

naturalitas) をまず原因するのであるが、これが愛という情念に属する。そして、これに悪の側から反対対立という仕方に対応するのが憎しみなのである⁴⁶。

《引用 5》ところで、愛の本来的な対象は善である。というのも、既に述べられたように、愛の内には愛する者が愛の対象に対して持つ自然本性に適った或る種の状態や好感 (quaedam connaturalitas vel complacentia) が含意されているが、個々のものにとっては、自身の自然本性に適い、釣り合いの取れたものこそが善だからである。それゆえ、善が愛の本来的な原因であることが帰結する⁴⁷。

しかしながら、上掲の二つのテキストが先の《引用 1》、《引用 2》のテキストと異なるのは、後者が自然本性的な愛とその他の愛を対比する文脈に置かれているのに対し、前者が、自然本性的な愛や感覚的な愛が等しく「善 (bonum)」を欲求対象とするという点をもとにそれらの愛を共通的に捉える文脈に置かれている点にある。そして、そのことが上掲の《引用 4》、《引用 5》において connaturalitas という語が自然本性的な愛以外の愛に対して用いられる理由として働いているように思われる。実際、先にも述べたように、善とは個々のものが自然本性的な仕方でも欲求するところの対象であり、欲求と欲求対象の関係を、当のものの同士の関係としてではなく、善を欲求する自己と可感的（或いは可知的）な善

⁴⁶ S.T.1-2, q.23, a.4, c.: In motibus autem appetitivae partis, bonum habet quasi virtutem attractivam, malum autem virtutem repulsivam. Bonum ergo primo quidem in potentia appetitiva causat quandam inclinationem, seu aptitudinem, seu connaturalitatem ad bonum, quod pertinet ad passionem amoris. Cui per contrarium respondet odium, ex parte mali.

⁴⁷ S.T.1-2, q.27, a.1, c.: Amoris autem proprium obiectum est bonum, quia, ut dictum est, amor importat quandam connaturalitatem vel complacentiam amantis ad amatum; unicuique autem est bonum id quod est sibi connaturale et proportionatum. Unde relinquitur quod bonum sit propria causa amoris. Unde relinquitur quod bonum sit propria causa amoris.

という視点から捉えるのであれば、そこでの欲求対象との関係は、善を欲求する自己の「自然本性に適った状態 (connaturalitas)」に他ならない。勿論、《引用 1》や《引用 2'》のようなテキストにあっても、善が欲求対象であること自体は変わらない。しかし、《引用 1》や《引用 2'》は欲求対象が善であることをもとに個々の愛に共通の枠組みを設ける上掲の二つのテキストとは異なり、個々の愛の相違に焦点を当てるものである限りで、それらの愛における欲求と欲求対象の関係の相違が自ずと浮かび上がってくる。実際、先の《引用 2'》が登場するのは、認識と欲求の関係を軸に個々の愛の在り方を確定していく文脈においてのことであり⁴⁸、そうした個々の愛の相違に着目する文脈からすれば、感覚的な愛や知性的な愛における欲求と欲求対象の関係に、自然本性的な愛と同様の connaturalitas という語を当てることは適切ではないわけである。

ところで、《引用 1》、《引用 2'》では、感覚的な愛と知性的な愛に対して *coaptatio* と共に *complacentia* という語が用いられているが、そのことはこの語が後述するように「好感・好ましき (*placentia*)」をその意味として持つものであるため、そうした心的態度を想起させる語を知性や感覚を欠いた愛の形である自然本性的な愛に対して用いることは適切さを欠くと考えたのかもしれない。その際、*complacentia* という語は

⁴⁸ つまり、先の《引用 2'》が登場するのは次のような文脈である。S.T.1-2, q.26, a.1, c.: Unde secundum differentiam appetitus est differentia amoris. Est enim quidam appetitus non consequens apprehensionem ipsius appetentis, sed alterius, et huiusmodi dicitur appetitus naturalis. Res enim naturales appetunt quod eis convenit secundum suam naturam, non per apprehensionem propriam, sed per apprehensionem instituentis naturam, ut in I libro dictum est. Alius autem est appetitus consequens apprehensionem ipsius appetentis, sed ex necessitate, non ex iudicio libero. Et talis est appetitus sensitivus in brutis, qui tamen in hominibus aliquid libertatis participat, in quantum obedit rationi. Alius autem est appetitus consequens apprehensionem appetentis secundum liberum iudicium. Et talis est appetitus rationalis sive intellectivus, qui dicitur voluntas. また、《引用 1》においても、受動という事態を巡っての自然本性的な愛、感覚的な愛、理性的な愛の相違が焦点となっている。S.T.1-2, q.26, a.2, c.

placere, placentia に cum という接頭辞が加えられた形であるが、placere という語が示すように、欲求対象の獲得によって生じるはずの「喜び (gaudium)」という情念と幾分か重なるところがある。実際、『神学大全』の一節において、トマスはこの喜び、或いはこの情念論において喜びと度々置換される「快 (delectatio)」という情念について説明する際、「快には二つものが存在している。一つは適合するものの知覚である。(…) いま一つは適合するものとして差し出されたものについての complacentia である」と述べ、喜び(快)の内に complacentia が含まれることを示唆している⁴⁹。つまり、complacentia という語が表すのは、愛という情念の内に「喜び」という情念が同居しているということである。もっとも、本来的に言って、喜びとは欲求対象が自己と実在的な仕方 (realiter) 結び付くことで生まれるものであるから、そうした意味での喜びは確かにこの愛の内には存在しない。しかし、前節を通じて見てきたように、愛とは欲求対象に対する認識を起源とするものであって、我々が或る対象を愛するというとき、我々の内には認識を通じて獲得された欲求対象の似姿 (similitudo) が存在している。そして、そうした似姿を通じて自己と欲求対象が結び付いていることからすれば、対象との実在的な合一によって生じる完全な喜びに先立つ、或る種の不完全な喜びの存在をこの愛の内に見取ることも不可能なことではないであろう⁵⁰。

さて、トマスが愛を表す上で用いる用語の内、connaturalitas, complacentia, coaptatio という三つの用語をもとに、欲求対象からの働きかけを受容する受動者としての欲求の在り方に注目してきた。以上に見られるように、欲求と欲求対象の関係を表す用語は、そこでの関係を

⁴⁹ S.T.1-2, q.11, a.1, ad 3: in delectatione duo sunt, scilicet perceptio convenientis, quae pertinet ad apprehensivam potentiam; et complacentia eius quod offertur ut conveniens. Et hoc pertinet ad appetitivam potentiam. 同様の記述が見出される箇所として、*In 1 Sent.*, d.45, q.1, a.1, sed c.3; *In 2 Sent.*, d.24, q.3, a.4, c. を参照。complacentia という語の内に「喜び (gaudium)」 「快 (delectatio)」 という情念の一部を見取することは、Miner, pp.117-118; Sherwin, pp.77-78; 山本, 2014 年, 224 頁など多くの論者が指摘していることである。

⁵⁰ S.T.1-2, q.11, a.4, c.; q.32, a.3, c.

捉える視点の相違によって厳然と区別され、そうした用語上の区別は主に自然本性的な愛と対比される中での感覚的な愛の位置付けやその在り方を明確にする。そして、こうした受動者としての欲求の内に起こった変化の状態を、欲求対象の働きかけを被った欲求が欲求対象へと向かう運動という視点において捉える上でより注目すべきことは、こうして欲求の内に起こった変化の状態が我々を欲求対象の獲得へ向けて駆り立て、そこへと向かわせる動的な根源として機能していることである。その際、欲求に起こった変化に心的な側面から光を当てる *complacentia* という語は、こうした欲求対象へと自ら向かおうとする欲求の在り方を強く浮かび上がらせる。引き続き、*complacentia* という語に関する考察をもとに、こうした受動者としての欲求の在り方に注目してみよう。

6. 魂の内から外へ：*complacentia boni* としての愛

さて、こうした *complacentia* という語を通じて自己を欲求対象へ向けて駆り立てるものとしての愛の姿が映し出されるのが、愛を通じて自己と愛の対象との間に起こる「相互内在」を問う文脈に置かれた次のテキストである。そこでトマスは *complacentia* という語をキー概念として次のように述べている。

《引用6》ところで、欲求的なちからに関して愛の対象が愛する者の内にあると言われるのは、何らかの好感 (*complacentia*) によって愛の対象が愛する者の情感の内にあることに基づいている。その結果、愛の対象が現存している場合には、愛する者は愛の対象や愛の対象に関わる善の内に快 (*delectatio*) を感じる。また、それが不在である場合には、欲望 (*desiderium*) を通じて、欲望の愛の場合には愛の対象自身へと向かい、また、友愛の愛の場合には愛の対象のために望むところの善へと向かう。このように向かうのは、或る人が何かを他の人のために欲望したり、また、或る人が何か別のものごとのために他の人に善を望んだりする場合のように、何か外的な原因からではない。むしろ、愛の対象に対する好感 (*complacentia*) が内深くに根付いたことによる。それゆえ、愛は「内奥にあるもの」と言われたり、また「愛

の心髄」と言われたりもするのである⁵¹。

《引用6》の内容を纏めてみよう。愛の結果として起こる相互内在は愛する者と愛の対象のどちらの側を基点としても考えることが可能であるが、「愛の対象が愛する者の内に存在する」という場合を考えたとき、それは愛の対象からの働きかけによって *complacentia* が愛する者の情感の内に刻印されることとして説明される。しかし、この情感の内に生じた *complacentia* は、愛の対象が自身の情感の内にあるということに愛する者を留まらせるものではない。愛の対象が自身のもとに現存しているというとき、愛する者は自身が刻印を受けた対象と実際に結び付くことで快を感じる。しかし、愛の対象が不在であるとき、愛する者は自身の情感の内に深く根付いた *complacentia* をもとに愛の対象の獲得を目指し、そこへと向かっていくとされているのである。

こうした《引用6》のテキストは、欲求対象からの働きかけを被った感覚的な欲求の変化の状態を対象へと向かう方向性の中で浮かび上がらせる。すなわち、我々がこれまでに見てきたように、感覚的な次元において、愛は欲求対象の働きかけを被った欲求が欲求対象へと動かされるに当たってその運動の始点・根源にあるものという仕方で説明されていた。しかしながら、そこで生じる対象へと向かう運動は、ただ欲求対象からの働きかけを被ることによって欲求がそこへと他動的な仕方で動かされるという類のものではない。むしろ、上記のテキストは、そうした欲求対象からの働きかけが欲求においてそのまま内的な促しとして内在

⁵¹ S.T.1-2, q.28, a.2, c.: Sed quantum ad vim appetitivam, amatum dicitur esse in amante, prout est per quamdam complacentiam in eius affectu, ut vel delectetur in eo, aut in bonis eius, apud praesentiam; vel in absentia, per desiderium tendat in ipsum amatum per amorem concupiscentiae; vel in bona quae vult amato, per amorem amicitiae; non quidem ex aliqua extrinseca causa, sicut cum aliquis desiderat aliquid propter alterum, vel cum aliquis vult bonum alteri propter aliquid aliud; sed propter complacentiam amati interius radicatam. Unde et amor dicitur intimus; et dicuntur viscera caritatis. この *complacentia* という語の性格に関わる《引用6》の取り扱いには Sherwin, pp.76-78 から示唆を受けた。

化し、我々をその内奥から欲求対象へ向けて突き動かすようなものであることを示唆している。すなわち、前節において見たように、我々の欲求対象とは常に「善」であり、そうした欲求対象が認識を通じて「自身にとって適合する善」として欲求に示される。すると、欲求は善へと向かおうとする内的な傾向性をもとに欲求対象からの働きかけに喜び (complacentia) を見出し、自ら進んで欲求対象へと向かっていくというわけである。その意味で、欲求対象へと向かう欲求の運動は、欲求対象という外的な作用者からの働きかけに起源を持ちながらも、自身の内からも生じる「内発的な運動」として考えられるわけである⁵²。

さて、以上に見られるように、欲求は、自身のもとへと引き寄せようとする欲求対象の働きかけに対し、喜びをもって応え、自ら進んでそこへと向かおうとする。トマスが complacentia という語を通じて浮かび上がらせようとするのは、そうした欲求対象へと向かおうとする動的な愛の姿であるわけである。

7. 結論：欲求対象へと向かう運動の根源としての愛

本稿において、魂の受動として語られる愛の記述をもとに、トマスにおいて愛がどのように捉えられているのかを見てきた。とりわけ、欲求対象という作用者と感覚的欲求という受動者の関係をもとに、トマスがそこで受動者である感覚的欲求の内に生じた愛を表す上で用いる「用語」に注目することで、トマスの語る愛の特質を浮かび上がらせようとした。

⁵² *In de divinis nominibus*, c.4, lect.11, n.449: nam timor est sicut motus violentus ab extrinseco proveniens, amor autem est sicut motus naturalis simul ab intimo procedens; S.C.G. 4, c.19; S.T.1-2, q.17, a.7, c. こうした愛の持つ内発的な性格は欲求対象を善とする愛に固有の特徴だと言える。実際、愛の対極に位置する憎しみという情念について見たとき、その対象は何かの悪である。そして、この悪なる対象が自身にとって背馳的で有害なものとして把握され、それが欲求に提示されることで、そこへと至る運動は、善へと向かおうとする我々の内的傾向性に反する「強制的な運動(motus violentus)」となって現れてくるのである。S.T.1-2, q.29, a.1, c.; q.35, a.6, ad 2.

その際、トマスは、魂の被る受動という事態を、欲求対象の働きかけを被った欲求が自身の内に生じた変化の状態をもとに欲求対象へと向かう「運動」という視点のもとで捉え、そうした欲求の展開する回帰的な運動の中に愛を位置付けていた。つまり、欲求対象が欲求に働きかけることで、欲求の内には欲求対象に対する好感や適合性——トマスはこの状態を愛と呼んでいた——といった状態が生まれ、欲求はこれをもとに欲求対象へと向かっていくわけであるが、愛はそうした運動の始点・根源に当たるものとされていたわけである。そこで、トマスがこうした愛の内実を表す上で用いる多くの用語は、こうした愛という情念をその多様な視点から描き出そうとするものであり、欲求対象の働きかけを被った欲求が欲求対象へと向かうその在り方は、そこでの心的態度に焦点を当てた *complacentia* という語において特に表されるものであった。すなわち、欲求対象がその働きかけを通じて欲求を自身のもとへと引き寄せようとする際、欲求はそれを「自身に適合する善」として捉えることで「喜び (*complacentia*)」をもってそれに応え、欲求対象へと向かっていく。そうして、トマスにおいて、*complacentia* という語は欲求対象へと自ら進んで向かおうとする欲求の心的な在り方を映し出すものとして機能し、いま魂の被る受動としての愛は欲求対象からの働きを起源としつつも、そこへと自発的に向かっていく動的なものとして捉えられることになったわけである。

もっとも、こうした愛の持つ動的な性格は、魂の被る受動としての感覚的な愛に限定されるようなものではない。本稿の冒頭において示したように、人間にはこの情念としての愛以外にも、それを超えた上位の愛、つまり知性的ないし理性的な愛という愛の形が存在している。そして、こうした愛の持つ動的な性格は、この上位の愛においても基本的に当てはまることであろう⁵³。むしろ、感覚的な愛と知性的ないし理性的な愛と

⁵³ 増田、42 頁は、『神学大全』第 1-2 部の情念論における第 26 問題から第 28 問題に亘る全 3 問題全 14 項に及ぶ愛の考察が感覚的な愛のみならず、知性的な愛や自然本性的な愛など、広く愛一般について適用できるものと言う。Cf. S.T.1-2, q.28, a.6, ad 1: Nos autem loquimur nunc de amore communiter accepto, prout comprehendit sub se amorem intellectualem, rationalem, animale, naturalem.

いう二つの愛を区別するものの一つは、それら二つの愛が共に愛の対象へと向かう動的な方向性を持つものでありつつ、そこで二つの愛がどのような仕方で愛の対象へと向かっていくかという点にある。それゆえ、次稿において、こうした点をもとに感覚的な愛と知性的な愛という二つの愛の相違について見ていくことで、人間が持つ愛の在り方について更に明瞭なものにしてみたい。そして、結論を先取りして述べるのであれば、トマスにおいて「愛する対象のために善を望む」という仕方での他者志向的な愛が成立するのは、この感覚的な愛の次元を超えた上位の愛、つまりは知性的な愛においてのことなのである。

8. 文献一覧

〈一次文献〉

テキスト

- Albertus Magnus, *Alberti Magni ordinis fratrum praedicatorum episcopi, Opera omnia* (Aschendorff: Münster, 1951-).
- ———, *Alberti Magni Opera omnia, tom. 24: Super Iohannem*, ed. Borgnet (Paris: Vivès, 1899).
- Aristoteles, *Aristoteles Latinus I 1-5 Categoriae vel Praedicamenta. Translatio Boethii, Editio Composite, Translatio Guillelmi de Moerbeka, Lemmata e Simplicii commentario decerpta, Pseudo-Augustini Paraphrasis Themistianae*, ed. L. Minio-Paluello (Desclée De Brouwer: Bruges-Paris 1961).
- Cajetanus, Thomas de Vio, *Opera Omnia iussa edita Leonis xiii p.m.: Summae Theologiae cum commentariis Thomae de Vio Caietani Ordinis Praedicatorum cardinalis, cura et studio fratrum eiusdem Ordinis*, 4-12 (Rome: Typographia polyglotta, 1888-1906).
- Thomas Aquinas, *Opera Omnia iussu impensaue Leonis xiii edita* (Rome: Typographia polyglotta, 1888-).
- ———, *Summa Theologiae*, edited by the Institute of Medieval Studies (Ottawa: Commissio Piana, 1953).
- ———, *Scriptum super libros Sententiarum*, ed. P. Mandonnet and M. F. Moos (Paris: Lethielleux, 1929-47).
- ———, *In librum beati Dionysii de Divinis Nominibus Expositio*, ed. C.

Pera (Roma: Marietti, 1950).

- ———, *In Aristotelis Librum de Anima Commentarium*, ed. P. F. Angeli M. Pirota (Roma: Marietti, 1959).

翻訳

- Thomas Aquinas, *Somme Théologique: Les passions de l'âme*, traduction française par M. Corvez, O.P. (Paris: Desclée & Cie, 1949).
- ———, *Die deutsche Thomas-Ausgabe*, Übers. von Dominikanern u. Benediktinern Deutschlands u. Österreichs (München: F. H. Kerle, 1955).
- ———, *Summa Theologiae*: Latin Text and English translation, Introduction, Notes, Appendices and Glossaries by E. D'Arcy (New York: McGraw-Hill, 1967).

〈二次文献〉

- Cunningham, S. B., *Reclaiming Moral Agency: The Moral Philosophy of Albert the Great* (Washington, D.C.: The Catholic Univ. of America Press, 2008).
- Drost, M. P., "In the realm of the senses: Saint Thomas Aquinas on sensory love, desire, and delight," *The Thomist* 59 (1995): 47-58.
- Deferrari, R. J., *A Lexicon of St. Thomas Aquinas based on the Summa Theologica and selected passages of his other works* (Washington, D.C.: The Catholic Univ. of America Press, 1948).
- Gallagher, D., "Desire for Beatitude and Love of Friendship in Thomas Aquinas," *Mediaeval Studies* 58 (1996): 1-47.
- Gondreau, P., *The Passions of Christ's Soul in the Theology of St. Thomas Aquinas* (Scranton, London: Univ. of Scranton Press, 2009).
- Gudaniec, A., "Amore come *complacentia boni* in Tommaso d'Aquino," in *Proceedings of the International Congress on Christian Humanism in the Third Millennium: The Perspective of Thomas Aquinas: 21-25 September 2003* (Vatican City: Pontificia Academia Sancti Thomae Aquinatis, 2004): 497-504.
- Guldentops, G., "Les amour d'Albert de Grant," *Mediævalia. Textos e estudos* 21 (2002): 37-55.
- Jordan, M., "Aquinas's Construction of a Moral Account of the Passions," *Freiburger Zeitschrift für philosophie und theologie* 33 (1986): 71-

97.

- Knuutilla, S., “Medieval Theories of the Passions of the Soul” in H. Lagerlund and M. Yrjönsuuri (eds.), *Emotions and Choice from Boethius to Descartes* (Dordrecht, Netherlands: Kluwer Academic Publishers, 2002): 49–83.
- ———, “Locating Emotions in the Categories” in J. Biard et I. Rosier-Catach (éds.), *La tradition médiévale des catégories* (XII^e–XV^e siècles) (Louvain: Peeters, 2003): 261–269.
- ———, *Emotions in Ancient and Medieval Philosophy* (Oxford: Clarendon Press, 2004).
- Kwasniewski, P., *The Ecstasy of Love in Thomas Aquinas* (Washington, D.C.: UMI Dissertation Services, 2002).
- Lombardo, N. E., *The Logic of Desire: Aquinas on Emotion* (Washington, D.C.: The Catholic Univ. of America Press, 2010).
- Malloy, C., *Love of God for His own Sake and Love of Beatitude. Ph. D. diss.* (UMI: The Catholic Univ. of America Press, 2001).
- ———, “Thomas on the Order of Love and Desire: A Development,” *The Thomist* 71 (2007): 65–87.
- Miner, R., *Thomas Aquinas on the Passions: A Study of Summa Theologiae 1a2ae 22–48* (Cambridge: Cambridge UP, 2009).
- Pinckaers, S.-T., “Les passions et la morale,” *Revue des sciences philosophiques et théologiques* 74 (1990): 379–91.
- Ramirez, S. M., *De passionibus animae, in I–II Summae Theologiae divi Thomae expositio (qq.XXII–XLVIII), Opera Omnia, tomus V* (Madrid: Instituto de Filosofia Luis Vives, 1973).
- Sherwin, M. S., *By Knowledge & By Love: Charity and Knowledge in the Moral Theology of St. Thomas Aquinas* (Washington, D.C.: The Catholic Univ. of America Press, 2005).
- Simonin, H.-D., “Autour de la solution thomiste du problème de l’amour,” *Archives d’Histoire doctrinale et littéraire du moyen âge* 6 (1931): 174–214.
- Torrell, J.-P., *St. Thomas Aquinas: The Person and His Work*, translated by R. Royal (Washington, D.C.: The Catholic Univ. of America Press, 1996).
- Wohlman, A., “Amour du bien propre et amour de soi dans la doctrine

thomiste de l'amour," *Revue Thomiste* 81 (1981): 204-234.

- 増田三彦, 「トマス・アキナス『神学大全』 I-II, qq.26-28 における愛について」『島根大学法文学部紀要文学科編』第3号(1980): 41-60 頁。
- 森啓, 「トマス・アキナス『神学大全』における *passiones animae*」『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学, 芸術)』第46号(1997): 17-23 頁。
- 山本芳久, 『トマス・アキナスにおける人格の存在論』(知泉書館, 2013 年)。
- ———, 『トマス・アキナス 肯定の哲学』(慶應義塾大学出版会, 2014 年)。